

手術のあとで

白内障の手術は小手術。しかし、手術を受ける身になればやはり手術は手術である。手術の前日、若い主治医は「今晚、睡眠剤を飲んで下さい。手術の前夜は寝つかれないものです。手術する目も休ませねば」と言う。私はこの短い言葉がすっかり気に入った。若くても信頼しよう。それまでの私の心は枝先のように細かく震えていたにちがいない。

看護婦たちがぴちぴちしている。手術前後の細かい注意をするのだが、「何もかもご存じの方でしょうか」と、自尊心を守ってくれる。余りにも慎重な患者心得に驚いて、理由を聞くと、きっぱり「目ですから」と答える。こんなことにも、患者は安心したくなる。

いよいよ手術の日。当番の看護婦さんは昨日と同じ人で何かしら心強い。彼女はいつも笑顔で語り続けるから。手術室に入る前に注射が数本、一つ一つ説明してくれる。「今度は心の興奮を抑える薬すずみですよ」。ああ、私にとってなんと救いの薬であろう。

私は精神不安には極めてもらいたちなんだから。

手術は終わった。問題の絶対安静の姿勢をとらされる。両目はぴったりふさがれ、頭は枕なしで低く、両側は砂枕で固定されてしまった。麻酔は覚めかかり、自意識は悪循環し、精神不安は頂点に至ろうとする。看護婦の励ます言葉にまじって、安定剤を要求する家族の声が聞こえたようだ。気が付いた時、私は白い朝を迎えていた。数日後彼女が顔を出した。お礼を言いそびれて、「あなたはいつも楽しく仕事をしていますね」とだけ言った。笑顔とともにいい言葉が返ってきた。「はい、私は仕事を大切にしたいんです」。

この病院は若い。しかし、医に対する厳格さと若さに満ちている。その名は大分医大。

(一九八三年六月八日)